

三月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

睦月朔日

森 重 香代子 山口

垣根より伸び立ち師走の風に揺るる世は寂し永く視てゐる
裏庭に日差し及び頃を来てあそぶ禽をりその名を知らず
撓むまで伸びし庭草に陽は差せりこの寂しさを人訪ふなかれ
誤魔化しを告げてるやうで好きでない睦月朔日わが誕生日
歳旦はわれの産まれ日その信疑問はむにすでに父母は亡し

幹のつぶやき

津 金 規 雄 神奈川

るりたては瑠璃に翔び去る小春日の陽にぬくみたる階はしを残して
後ろより見るとき鴨の水掻きは動き際やか浮く身をはこぶ
わが生はここにしづもる睡蓮の浮葉少なき冬池の辺に
身のめぐり裸木ばかりあらはなる幹のつぶやき途絶えることなし
横ざまに傾きのほりくるオリオンその身は半ば丘に隠るる

ブルース気分

原 賀 環 子 東京

キッチンに黒板掛けてくらしけり黒板消しはおしろいのパフ
小麦粉をゆふべメリケン粉と呼べばすこしブルース気分のくりや
大仕事増えてかなしゑ歌づくりかまに感かけて鍋をこがしてしまふ
こげこげの鍋に水張り放置せり捨てつちまをか鍋もわたしも
晩秋の家内やうちは閑かルナールへ行くまへちよつと星空あふぐ

「荒浜小」見て海へ

斉 藤 梢 宮城

冬晴れの休日なれば外そと出して左に「荒浜小」見て海へ
藤塚の集落跡の猿田彦珈琲店の窓辺に座る

この海のかの日の牙を思ひつつ集落跡で夕陽見てをり
なにかも攫はれしかの被災地にパン屋さんありケーキ屋さんあり
鬼ごつこの子らと鶺鴒一羽みてかつての被災地今はあたたか

☆

☆



水鳥晴子 兵庫

丹念に拭ひ清めつ電子辞書わたしの脳もすこし清まれ
窓ちかき植込みに寄り頬白は一羽を呼びて共に飛び去る
ひと夜経て地に嵩み敷くきん色の落葉よ銀杏いちごぎ一木のゆめ
青天に鳥のこゑして朝しづか障礙しょうがいもあらぬ地とおもふまで
繁の葉に終なる紅をたたへつつ溪の楓はしづもりてあり

武田弘之 神奈川

「誤植ある校正刷ゲラは臭ふ」と言ふわれを友ら笑ひき校正室に
訪へば白秋歌曲を病室に聴きいましたり野村清は
宮柊二と野村清と語り合ふ宝のやうな幾度を見き
自選作ならねば作者うべなはぬ歌あらん「物故者作品抄」に
權威もつ人に倣ひて言ふさまの卑しさは見ゆ戦中のごと

高野公彦 千葉

夏掛なつがけを仕舞ひて電気毛布出せば那覇より釧路へ移住すること
紙文化、活字文化のすたれゆく令和さびしとペガ光りをり
ほろ酔ひでことば遊びを楽しめりするめはミライから来たミイラン
日々食べて歌など詠めど人生はむろん未完のサグラダ・ファミリア
年取るを負おと思はずに富と思へ 励ますやうな寒夕焼よ

奥村晃作* 東京

老い二人高速バスに身を伸ばし眠っていますシーンと静か
十八で飯田離れて七十年東京で暮らす好き放題に
名を知らぬ山また山を眺めつつ高速バスの窓べにいます
富士山が見えて来ましたすぐ分かる山また山の後ろに聳ゆ
満員の高速バスはひた走る振動わずか人語聞こえず

日影康子 富山

丈伸びし草穂の先へ来て止まり朝の塩辛蜻蛉しほあせながく動かす
洗ひ髪干しるし午後の部屋の内ぞくがにガラス戸へ近付く揚羽蝶あげは
蒼天に雲なさま昼ミズキの実を二羽の鶉つぐみが連れて啄む
玉すだれの花地に低くしろじろと咲き連なれり寺庭の秋
年一度の寺の報恩講に出講の実家さとの従弟の法話をば聴く

影山一男 千葉

川沿ひにおさんぽバスは進みゆく老い(我を含む)あまたを乗せて
神保町すずらん通りはつ冬の日ざしを受けて老いの影ゆく
浅野屋の前を過ぎつつ思ふかな友らと若く酔ひどれし日を
サントリーレッドを一気に生まで飲みし河野裕子よまだ病まざりき
甘いもの買ふわれどこかで笑ひあむ小紋潤来よ神保町に

桑原正紀 東京

瀬の音の徐々に昂まる忙しさの師走たちまちなかばを過ぎつ
適当に「年内」と言ひし約束のあれこれごとと押し寄せて来ぬ
一年で背が五センチも伸びしころ時間をもととゆつくり過ぎた
一日をたつぶりあそびつづしつ待つ正月の遠かりしかな
正月に年取るならひありしころ年の数だけ餅たひらげき

狩野 一男 東京

其の昔クマもたくさん居たけれど長閑だつたぜ花山村は
トラブルに明け暮れてゐる老者にも無いわけぢやない面白い夢
達成感充実感無き日々重ねまるまる四年経つてしまつた
手をつなぐことなどあらず颯々と前ゆく妻よ年をとつたな
先生の山茶花咲いて十二月 来月といふ来年を待つ

宮里 信輝 神奈川

宮ヶ瀬ダムまでクルマにて二〇分 鳥居原まで四〇分なり
宮ヶ瀬ダム駐車場他無料なり約一年間ほど通ひたり
宮ヶ瀬ダムからさらに二〇分走れば「鳥居原湖畔庭園」

「鳥居原湖畔庭園」は魅力なり湖見ながら散策可能

十時ごろになればクルマで出かけむか鳥居原湖畔庭園歩きに

小島 ゆかり 東京

歳晩の渋谷の街に来てしばしハチ公と同じ雨に濡れたり
今といふ圧力すぎさ渋谷街ハチ公とわれ過去にたたずむ
存在の断片が時の断片が過ぎゆける雨のスクランブル交差点
この街は戦場ならず袋からはみ出す来年用カレンダー
数へ日のあしたゆふべにパレスチナの死傷者のかず概算で聞く

木畑 紀子 京都

霜降に菜の花の種蒔きにけりちさき双葉の出でて立冬
これからの寒さよろこび伸びゆかん菜の花の芽のみどり刈しも
種袋よくよく読めば原産地ブータンとあり菜の花よ咲け
新婚の家居に花をあまた植ゑ満たされざりし五十年まへ
花めぐる老いの日にち憂きわれを寂しがらせてくれる花たち

島田 暉 神奈川

容赦せず病院爆破する戦鏡であらば鏡こはさむ
人さまの憎しみなどは投げ捨てて不眠の銀河にかがやき生きむ
あちこちにおこる戦争火の色す吾は紅花君も紅花
海波のつづく愛撫をくり返す夜中の浜に妻と歩めり
図書館の本に疲れて窓のぞくわたしはトンボ青空を翔ぶ

大松 達 知* 東京

「同意した」押さないと先にすすめない押せば進める同意しなくても
買うことに大きな丸のありましてそれから先はほほほほ余命
二枚です、差し出されたる一皿に餃子たち夜を容れたる棺のように
ひとりずつ示寂してゆく餃子たち夜を容れたる棺のように
匿すように蒿草でビーフを巻きながら燕スワロウ雀スパロウ

田宮 朋子 新潟

杉の葉を枝ごと落とす烈風のをさまりてのち百雷きたる
冬の夜の空の九頭竜ひかり噴き大音声をたてて哮りぬ
四方四維上下の闇のすきまより閃光入りて眠りを覚ます
暴れ竜いづこかへ去り音またく絶えしあかつき雪降りはじめ
あけがたの屋根に落葉に純白のタオル地ほどの初雪つもる

小山 富紀子 京都

ふん、ふん、ふん歌が出来たよふん、ふんやうやく今日は秋深き空
自分では買はへんけれど貰うたら嬉しきものよ伊勢の赤福
災ひとなるか恵みとなる雨か夜の雨足強まりてゆく
放置田の土は悲しも叢すすきさやげば主が来たかと思ふ
掃き寄せし落葉を積みば匂ひたり不順なれども季は移りゆく

清水正子 神奈川

白炎のごと雨に咲く山茶花の木も憂ひぬむガザ空爆を
「戦争の窓」とスマホをいふ記事ありロケット弾飛ぶ写真と共に
詰まるところ領土争ひと識者いひ(戦争一〇)に分類したり
「戦争の窓」のスマホに此の頃みずガザ市街ゆく引き売りの驢馬
小鳥鳴きいつも通りの朝がきぬこの安らぎをガザの人にも

小嶋一郎 佐賀

一段とすすむ猫背のこの影がつまらぬ歌の材料となる
食前と食後の菓飲み違へ何ごともなし独りの秘密
三度目の入院を経て知りたるは過度の水分摂取の怖さ
この老いの眼に注す薬あすまでの量を残さむ師走の日なた
退院後いかにと尋ね電話あり徳之島より隣家よりけふ

故後 藤美子 北海道

卒寿ちかきわが身考へストープの温度二度ほど上げて起き出づ
新聞の「今日の歴史」の最初なり「北原白秋死去57歳」
小高賢『老いの歌』読みすすむ老人にならず逝きたりし著者
あふことはつひに無かりき丸善に予約して『秋の茱萸坂』を買ふ
おそらくは読まず逝きにしひとをおもふよき歌集評歌誌に読みつつ

福士りか 青森

四十にして産みしひとり子をとこの子友に笑顔と強さ与へき
淡々と胸のしこりを打ち明くるもそのステージに触れざりき友は
泣きことも繰り返すも言はず「ありがとう」が口癖だった友の闘病
ひとり子が成人するまであと二年どんなにどんなに生きたかつたか
アエスbの黒のTシャツいつの間にか父の背丈を追ひ越してをり

藤野早苗 福岡

いつまでも温き師走のその先の 吞まるるまいぞ辰の空亡
穏やかで家族が高圧的でないそのみに優良入居者といふ
やがて来るその日にわれが泣かぬやう憎まれ上手よたらちねの業
へつつひに枯れ木燃やせば尽きるまで 火は火を呼びびて大火となる
パンケーキレシピよりやや多めなる金のバターが冬を濃くする

風間博夫 千葉

クシヤクシヤと一枚の紙まるめたら生れたりクシヤクシヤのひとつ紙屑
ペラペラであれど凶器の紙の縁血の(じ)みたる切り傷残す
下敷きをはさまず強く書きたれば下の紙にとその文字うつる
カミソリを当ててただけでは剃れません(滑らせる)髭をすべらせて剃る
鳴つてゐた切符切るとき切らぬとき(かち)カチカチカチ(かち)カチカチカチ

奥村晃作歌集 令和5年12月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

蜘蛛の歌 コスモス叢書第1232篇 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七-151-16

大松達知歌集 令和6年1月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

ばんじろう コスモス叢書第1233篇 六花書林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚三-24-10

マリノホームズ1A 六花書林

田中愛子 埼玉

人住まぬ冬の生家を思ふときしろきざんくわにしろき雪ふる
村人が陰で(テンノウ)と呼びてゐき心こはれて帰還せし人
温泉につどひ語らふ四人組の三番目にてわれは死にたし
姑が遺ししサクマドロップ含むなり賞味期限が三月すぎるを
春がくるころにひよつこり見つかるかしまひ忘れのモコモコバジャマ

橘 芳 園 新潟

虫殺し米、野菜穫る檀徒みな家には大き仏壇持てり
田に入らず虫も殺さず汗もせず祖ら仏を説きてきたりぬ
亡き人に法名あまたつけし我僧辞め俗名のままにて逝かむ
死後にあふ顔あるならばそむきたる父母、檀徒にあはす顔なし
信、不信問ひ続けるに意味ありやわが(持ち時間)なくなりてきぬ

水上 比呂美 東京

知恵の木はエデンの園の丘にありその実を食むと必ずや死ぬ
ナイフではなく林檎の実を回します蛇のやうなる暗紅の皮
虫に刺され血管を毒が巡りたる感覚のありあかねさす昼
高原に実りてゐたる黒りんごじゆくじゆくと肥る黒りんごの実
(眠り)には(明日)が続きその先は生まれる前と同じ薄闇

鈴木 竹志 愛知

こんなにも穏やかな日々続く秋されど世界はいささか不穏
不穏なる世界の片隅に生きをれば情報にまた縋らむとする
情報は水母のごとく浮遊してちらちら見せる真実めくを
秋明菊こごぞとばかり咲きだしてわたしは少し苛立ちてゐる
つばぶきの蕾ほこほこわきだせり炎熱の日々を今日まで耐へて

水上 英季 神奈川

二分半の(エレクトリックレールウェイ)のみ子と乗つて去るデイズニ―シー
地球平面説の絵が好きキングサイズベッドに赤児を寝かす
ゴールドの光の中で子の肌着洗つてをりぬ幕張の夜
朝食のオムレツを食むわれのよこ赤児を見をりステンドグラス
山茶花の咲く散歩道影ふえて ぐるつと回り家に帰らう

大野 英子 福岡

死ぬ前に何食べたいつて、食べられぬから死ぬことを知らぬ人言ふ
判で押したやうなくらしのつまらなさそれさへできぬ日がいつか来て
埋まらないころのかはりに埋めてあるポイントアップの日に冷蔵庫庫
新しき油をくぐるアジフライしばし潜水を楽しむやうに
食べることに楽しんでゐる楽しみの風の軽さの最後の砦

松尾 祥子 東京

年またぎひと月姉が籠もるといふタイの森林の奥のタモ寺
一日一餉、人と語らず小屋にひと月姉は瞑想修業す
蚊を食べる大蜥蜴を食べる蛇を食べる孔雀をサソリ暮らす密林
ヴィバツサナー瞑想八年続け来て姉は行く自己を捨て去る修業
解脱するために瞑想選びたる姉は亡き子の写真携ふ

鈴木 千登世 山口

銀色の曲線美しき蛇口よりほとばしる冬の水を飲み干す
蛇といふ出自をとほく置き去りて澄む水ひたに零せる(じやくち)
洋裁の間と呼ぶ部屋に(ANOME)とふ金文字モダンなミシンがありき
(じやくち)から蛇の浮かばぬことに似て(ANOME)に(蛇)の思ふことなし
佐太郎の歌に覚えし(蛇崩)は災害地名と知る 蛇は神

小鳥 な お* 東京

焚きあげの炎の底に崩れゆく城のようなものを囲めり
御守りの燃えあがる夜を鳥の羽詰めた布団に埋まり眠る
金色の刺繡ほどけて御守りはお金になって子どもになって
鈴音が呼び寄せる真空の夜 笑った声が星を砕けり
神棚に向かう私の後ろには列なし泳ぐ蝌蚪らがつづく

小田部 雅子 静岡

未明よりしづかに降れる冬のあめ時のうごかぬまま夜に入る
侘助の花散りほひて砂利の上つと立ちあがる、朝風の息
大根は連作がよし四年目の畝にむんむん白き肩ならぶ
二〇粒まけば二〇個芽がいでむつちり白きこの二〇本
人界に今日もやまざる政治悪 びつしり芽吹くわれの小松菜

うたを味わう——食べ物の歌 ● 高野公彦

三月の味 ——春キャベツ——

飲食は予め来るよろこびに似ずやさく
さくと春キャベツ剪る 尾崎左水子

近ごろキャベツが少し値上がりしているらしい。そういえば、ときどき昼飯を食べにゆく定食屋の、エビフライに添える干切りキャベツの量が少なくなつたような気がする。

キャベツは、それ自体おいしい。焼鳥屋で、はりはりキャベツというのを出すところがある。単にキャベツの葉を丸ごとちぎつたのが五、六枚、皿の上に載っているだ

け。それに塩をつけて食べる。はりはりした食感とほのかな甘みが合わさつて、まことにうまいのだ。

右の歌(歌集「春雪ふたたび」より)は、さくさくと切っているから、フライか何かに添えるのである。作者はキャベツを切りながら、実際に食事している時のことを想像し楽しんでゐる。この「予め来るよろこび」を味わえるのは、食事の支度をする女性だけであろう。もつとも、近年は男性でも厨房に入る人が増えているらしい。

もちろんゴチソウの中心は肉類や魚介類であり、大体的場合、野菜は脇役である。

でも、それでいいのだろう。人間の社会でも、全ての人が偉人だったりヒーローやヒロインだったりしたら、社会が成り立たない。野菜は、主役を支える力強い脇役なのだ。

野菜といっても種類が多い。試みに、特に有力な野菜を九種類えらび、私的に野球チームを作つてみたら、次のようになった。「一番白菜、二番ねぎ、三番だいこん、四番ナス、五番キャベツ、六番たまねぎ、七番きゅうり、八番しいたけ、九番トマト。(控え選手、ほうれん草、ごぼう)」。ナスを四番バッテリーにしたのは、煮てよし、焼いてよし、炒めてよし、漬けてよし、という意外にパワフルな野菜だからである。